

# 近代ドイツ語圏における「ユダヤ人性」

長沼宗昭

## はじめに

タイトルは近代ドイツ語圏における「ユダヤ人性」、「ユダヤ人性」というのもあまり耳慣れない言葉ですが、英語で言えば Jewishness、つまるところユダヤ人をどう考えるか、ユダヤ人のあり方の問題を指しています。この問題に関連して、しばしば「ユダヤ人問題」という言葉が使われてきましたが、私は、この言葉を自身の用語としては使いません。それは結局ユダヤ人という存在を、まさに「問題」視し、そして対象化して

いくという状況のなかから生まれてきた言葉だからです。ドイツ語で言えば Judenfrage という言葉ですが、それがどういういきさつで出てきたのかという論文があります。それによれば、十八世紀の終わり近くに、英語圏で Jew question という表現が生まれました。それが Jewish question となり、だいたい十九世紀初めにはドイツ語の世界に入ってきて、一八三〇年代にかけて、それをほぼ置き換えて Judenfrage となったものようです。

これは理屈を考えると、前近代社会にあつては、

ユダヤ人という存在はある宗教集団というふうと考えられていました。基本的にヨーロッパの社会構成は、住民あるいは国民という概念があるとすれば、統治権者がその一人一人を把握するというのではなく、中間団体を仲介にして把握していたのです。ですから、ギルドとか、あるいはコルポラティオンという言葉で表

ざしを含んだ言葉として「ユダヤ人問題」なる用語が成立したのです。かつては私もそのような言葉を使つたこともありましたが、最近では使わないようにしています。

ユダヤ人という存在を、歴史の長い局面にあつて、特に近代になってからですが、どういう存在として理解するかということが、とりわけヨーロッパ社会の問題になってきました。それは逆に言えば、ユダヤ人という存在が一義的には定義しにくい、いろいろなニュアンスを含んだ存在であつたからで、それは今日でも同じ事です。その一方で私たちは、ユダヤ人をつい民族や人種といった観念枠のなかでとらえがちでしたから、ユダヤ教に改宗する、つまりユダヤ人になるということも、なかなか感覚的には理解できないでいます。ごく最近のことですが、アメリカのロックシンガーで、マドンナというスーパースターが、イスラエルでの新年の行事に参加し、その事が大変な話題になりました。もっとも、日本ではほとんど報道されなかったと思いますが、ユダヤ教の暦は、太陽暦と太陰暦をミックス

それが、近代に入つてだんだん崩れていき、「ユダヤ人解放」が進んでくるなかで、むしろ中間団体ではなく個々のユダヤ人をどう掌握していこうかという、統治の側からのテーマが出てくるわけです。そういうなかでユダヤ人の「問題」をまさに問題視していくという事ですから、明らかに方向性のある、差別のまな

させた太陰太陽暦でして、新年も、一定の範囲内で年ごとに移動します。したがって、だいたい太陽暦の九月の中旬から下旬にかけてがお正月ということになります。その新年の行事に参加するために、マドンナはイスラエルに出かけました(二〇〇四年九月)。彼女はカトリックの生まれなのですが、真剣にユダヤ教に改宗しようと考えているようです。マドンナが改宗すれば、彼女はユダヤ人として新たにその社会に入っていくわけでして、きっちりとした枠組みが考えにくいのです。

またドイツでは、ユダヤ人コミュニティ *Juden-Gemeinde* は公法上の団体として考えられており、ベルリンにはユダヤ人コミュニティ付設の図書館があります。そこでは、九〇年代の半ばからロシア語の新聞があふれるようになりました。そのスタッフで、もともとはドイツ語の世界で育った、ドイツ系のユダヤ人だろうと思っていた人が、ある日気がついたらロシア語を流暢にしゃべっていて、そこに来る人たちも、ほとんどがロシア語の小説などを探しに來ています。新

聞が揃えてあるのですが、大半がロシア語の新聞なのです。だいたい今ベルリンには一万二千前後のユダヤ人がいると彼らはいっていますが、結局ユダヤ人の定義が不明確ですから、厳密には統計などとれないわけです。ですからある種の幅でしかいえないのですけれども、だいたい一万二千人ぐらいいる、そのうちのほぼ三分の二が旧ソ連の出身者なのです。九〇年代の半ば以降、ベルリンをめがけてやってきました。ドイツの現在のユダヤ人社会もある意味では流動的で動いています。ことほど左様に、どここのユダヤ人といっても実態は相当に変わっていて一義的にとらえにくいわけです。

前近代では宗教の問題にかなりが帰着するわけでした、ユダヤ人という表現がほとんどユダヤ教徒という意味合いで使われておりました。ユダヤ教徒もしくはユダヤ人は、我々の觀念のなかではしばしば一枚岩的な、一つのまとまった存在であろうと考えられる節が多いと思われれますが、近代以降は必ずしもそうではないのです。

英語やドイツ語でユダヤ教に当たる言葉を使うとすれば、*Judaism* や、*Judentum* といった表現になるだろうと思います。ドイツ語にも *Judaismus* という言葉がないわけではありませんし、相当限定した議論の場合には使うことはありますが、一般には *Judentum* という言葉を使っています。しかしこれはユダヤ教と訳すだけではなく、ユダヤ的なもの、あるいはユダヤ人のあり方、ユダヤ人性というものを含んでいくわけです。ユダヤ人やユダヤ教徒というそれぞれの概念が、重なりあう場合が多いのですが、イコールではない場合もありますから、どんな存在として、どんな幅のなかで存在してきたのか、このことが大変難しい問題を投げかけているのです。

### 十八世紀半ば以前

ここでは、十八世紀半ばを画期として、それ以前と以後とで考えてみることにします。十八世紀半ば以前については宗教的なカテゴリーでとらえる必要があり、それでだいたい済みます。ユダヤ教という宗教は、必

ずしも古いばかりの宗教ではないのです。普通は古代にできあがった古い宗教、キリスト教以前の宗教だと思われています。しかし、現在生きている、ある意味では世界宗教でして、そうした性格を持ったユダヤ教は、いわゆる新約時代以後も発展を続け、そしてそれが重要な意味を持ってきたのです。

たとえばラビのユダヤ教 *rabbinic Judaism* という言葉があります。ラビと呼ばれる人々については後で触れますが、その存在が宗教上の重要な意味を帯びてくる段階があるのです。それはまた『タルムード』という文献を媒介にしてできあがっていくものです。十九世紀になりまずと進化論的発想とか、社会ダーウィニズム的な見方のなかから、宗教発展の三段階のような議論がかなり一般化し、野蛮もしくは未開な宗教、そして民族宗教、さらに世界宗教というような三段階があると考えられ、ユダヤ教は民族宗教に相当するといわれておりました。そこから世界宗教としてのキリスト教へとという筋道ですが、実際には、キリスト教成立後の五世紀とか六世紀になってできあがる『タルムード』

が非常に重要な意味を持ちます。これは大変長く分かりにくいものですが、ユダヤ教はこの『タルムード』を含めて考えないといけないのです。

もちろんユダヤ教では、基本的には『トーラー』が何といつても重要な文書です。これは『モーセ五書』(創世記・出エジプト記・レヴィ記・民数記・申命記)ともいい、一般には旧約と呼ばれているヘブライ語聖書の冒頭部分を指すわけですが、その原型は非常に古いものです。恐らくは、ヤハウェという唯一の神を共通に信仰する部族連合ができあがり、こういうものが確かに紀元前二千年紀の段階でできあがっていたのだらうと考えられますが、宗教的な面から考えていけば、もちろん宗教をどう定義するかの問題になりますが、この人たちの信仰の在り方は必ずしも完成された姿とはいえなかっただらうと思います。そして紀元前六世紀にバビロン捕囚という事件が起こります。新バビロニアによって、パレスチナに住んでいた一神教集団の中核的な部分、その人数は必ずしも多かったとは思えないのですが、それが拉致・連行されるのです。そのこと

が従来の一神教伝承にさまざまな影響を与えていきます。故郷・故地を偲びながら、ある意味では思想的に純化が進んでいたと考えられるわけで、伝承そのものは以前からあっただらうと思われるのですが、それが整理されたり洗練されていき、文書化され、さらには聖典化していったと考えられます。このバビロン捕囚の体験、それに伴って『トーラー』が聖典化されるということが、ユダヤ教の成立にとって重要な段階を画していただらうと思われます。

かつては、エルサレムに信仰の中心としての神殿がありました。それがバビロン捕囚の際に壊されてしまいます。ソロモンが建てたとされる第一神殿が、そこで崩壊してしまつたのです。その後、バビロンに連れ去られた人たちが、そのうちの相当数は残つたようなのですが、また戻ってきた人たちによって神殿が再建されます。それが第二神殿です。それも紀元後七〇年に、ローマ軍によって破壊され、第一次ユダヤ戦争を通じてなくなつてしまいます。この第二神殿の崩壊後は今に至るまで、ユダヤ教の立場からの神殿は造られてい

ません。そうすると、かつては祭司層とか神官層と呼ばれていた、まさに神殿を支えていく宗教の担い手がいなくなつてしまうのです。神殿がない以上はそういう人々の役割もなくなつてしまうからです。そうすると、その後宗教的に重要な意味を発揮するのは、ラビと呼ばれている人々です。ラビという言葉自体は、元来は教師、先生といった意味合いですが、よく律法学者などと訳されています。啓示宗教であるユダヤ教は、神の命令として、してはならないこと、あるいはこうすべきであるといった、禁止規定や遵守規定を数多く含んでいます。それら数多くの規定が『トーラー』のなかに記されており、そうすると、現実の生活のなかで、地域が変わつたり時代が変わつたりしたとき、それにどう適応していくのかという問題が大きくなつていきます。それを議論したり整理していく立場の人たちが、律法に基づいたさまざまな研究を行い、現実的に即して解釈するわけです。ですからラビと呼ばれる人々は、神殿が崩壊する以前からいたのですけれども、彼らに中心的な役割がずっと移っていきます。そうし

た解釈を軸にした一種の宗教的な伝統が、パレスチナの地域で、あるいはバビロン捕囚の地のバビロニアでも作られていきます。口承で、いろいろな解釈や判断、要するに宗教的な判例のようなものが積み重ねられていきます。それをまとめて、それまでは口承の形だったものを文書化します。文書化は二世紀から三世紀ぐらいにかけて行われただらうと考えられているのですが、その文書が「ミシュナー」と呼ばれる部分です。そこにさらに注解をつけていきます。それは「ゲマラ」と呼ばれ、「ミシュナー」と「ゲマラ」が集まつたものが『タルムード』です。それが、成立と継承の仕方によって二種類できるわけです。『パレスチナ・タルムード』と『バビロニア・タルムード』です。実際の宗教生活では、絶えず『タルムード』に立ち返りながら、こういうことをして良いだらうかということが問題になります。ですから生きている信仰としてのユダヤ教は、『タルムード』が非常に大きな意味を持つわけです。ただしこれは膨大なもので、いわば平信徒としての一般の信者では手を出しかねるようなものです

から、ますます専門職としてのラビの役割が大きくなっていくのです。『タルムード』を必須な宗教文献と考えるなら、『新約聖書』の確立以後、ただし『新約』といっても、現在見られるような順序・形式に編集され、聖典化していくのはだいたい三世紀ぐらいにならないと考えられないのですが、いずれにしても『新約』が確立したあとに『タルムード』ができるわけです。そういうふうを考えれば、ユダヤ教の成立はむしろキリスト教より遅いという人もいるくらいです。

ユダヤ教のなかでは細かい論争のようなものはたくさんあるのですが、必ずしも宗派として分かれていたとはいいいくところがあります。神学的な理論の問題として考えると、宗派といえるのはカライ派というグループで、この人たちは『タルムード』を認めず、典拠としては『トーラー』しか認めません。これが八世紀の初めにペルシアで始まり、その後中東、地中海世界などに広がります。十二世紀以降は衰えてしまいましたが、ビザンツ帝国内に中心をおき、近代になってもロシアでツァーリの政府がこのグループを保護する

のです。クリミアや今日のポーランド、リトアニアあたりに拠点を持ち続けて存続してきました。現在でも極めて少数、ただし今は正統派とあまり対立しておりませんが、イスラエルのなかに独自のコミュニティを残しています。数百人の規模でしかありませんが、そういう町が今でもあります。要するに、宗教的には圧倒的な中心部をなす伝統的ユダヤ教、つまりラビのユダヤ教というものがあつて、それとは異なるカライ派というものがあつたと理解できるのです。

それから、ユダヤ人と呼ばれる集団全体を考えますと、系譜的に明らかに異なるグループがあります。それが、セファルディームとアシケナジームです。セファルディームというのは、もともとスファラードという、ヘブライ語でイベリア半島あたりを意味する言葉から名づけられた人々です。ユダヤ教徒は、一四九二年にスペインから追放され、その後ポルトガルからも追放されましたが、なかには一部キリスト教への改宗を余儀なくされて残った人々もおります。その残った人々は、通常、改宗者ということでコンベルソと

呼ばれましたが、彼らに対する俗称あるいは蔑称がマラーノというスペイン語でして、これは相当にひどい蔑視の言葉です。ユダヤ教徒は元来ムスリム同様に豚肉を食べないのであつて、マラーノというのは豚を意味する言葉ですから、これは非常な差別表現なのです。つまりキリスト教徒になつても、こうした言葉で呼ばれ、差別されたのです。ユダヤ人は、前近代社会にあつては、基本的には宗教上のカテゴリーであり、彼らがキリスト教に改宗すれば、それまでキリスト教世界が加えていた圧迫というものはほとんどなくなつてきたはずですが、実際にはそうとはいえない状況、つまり血の問題として、血縁的な形で改宗者集団をみていくという状況が、明らかに十五世紀末以降のイベリア半島に始まつていくわけです。

セファルディームは、十五世紀以前のイベリア半島あたりで使われていた言葉が原型になつていて、ラディノ語という言語を使っています。彼らは追放された後、地中海世界、もっぱらオスマン帝国の範囲内に住み着き、一部はボルドーあるいはオランダあたりに移

住します。面白いことに、ブルガリアがかつてはオスマン帝国の領土内でしたけれども、そこにはかなりのセファルディームのコミュニティが残り、今でもこの系譜が認められるようです。この人達が母語としてしゃべっていたラディノ語はスペイン語に非常に近いわけであつて、そのなかからスペイン市民戦争時に国際義勇軍に加わるユダヤ人が出てきたりします。日頃は、ブルガリア語の世界にもいますからスラブ系の言語に強いわけで、ロシア語もおおよそ分かつてしまっています。ドナウ川の下流地帯にあるルセという都市、トルコ語ではルスチュクと言いますが、そこには、少なくとも二十世紀初めまでは、スパニオール街と呼ばれていたセファルディームの住み着いた町がありました。ノーベル文学賞を受賞したE・カネッティはその出身です。そうした世界に住んでいた人達が、スペインに行つて地元の人とスペイン語でコミュニケーションをとる、国際義勇軍の仲間とはブルガリア語やロシア語で会話するという、大変面白い役割を發揮したりしました。

アシケナジームは、元来ライン川の周辺地帯に居住していたユダヤ教徒を指す言葉でした。もともとは北の人という意味合いからでてきたようなのですが、アシケナーズという言葉がライン川周辺のドイツあたりを指すことになり、それがだんだんと広がってきます。その人々がイディッシュ語を使っているのです。イディッシュ語というのは、中世のドイツ語を母体にしながら、単語レベルではヘブライ語や、ロシア語とかさまざまなスラブ系の言語、時には明らかにフランス語あるいはイタリア語から入ってきたと思われる言葉も入っております。これが実際の生活の中で使う言葉でしたから、逆にイディッシュ語からの逆輸入のような形でドイツ語に入っていく、ドイツ語の俗語表現となったような言葉もあります。

ドイツ語圏のユダヤ人は、だいたいアシケナジームということになりますが、セファルディームも関わってまいります。マラーノは商業的なセンスがあつたようで、かなり裕福な商人達が、一応表面的にはキリスト教徒という格好で出てくるのですが、なかにはま

に変わるといふケースが出てくるのです。

もう一つ、ユダヤ教徒の集団としてハシディームといるのがありますが、非常に神秘主義的な傾向を持つユダヤ教内一派が、現在でいえばポーランドからウクライナにかけての地域に出てまいります。ユダヤ教神学の正統なる理論からすれば大分問題がある考え方だろうと思うのですけれども、その指導者はいわば神に近い人だと考えられるのです。ユダヤ教では、人間は神とは明らかに区別される存在で、特にカトリックのような神との仲介者としての聖職者という考え方も否定するのですが、ハシッドの場合は指導者が神に属する人たちであり、神と平信徒との仲介を行う存在として考えられています。神学的には面白い、あるいは妙な存在です。それに引きずられていく人々もいたのですが、これは猛烈な反対に出会います。反対者達によって圧迫され、それでも細々と続いて、今でもそのハシディズムのグループというのはあります。ですから、ちよつとユダヤ人の世界を眺めていくと、とても一筋縄ではいかないような多様性を持っていた

たユダヤ教に戻ってしまうという人も案外いたようです。そして、大西洋沿岸の重要な商業的拠点を移動してハンブルクに行くというケースがありました。ハンブルクのユダヤ人の歴史をみると、十六世紀後半までは、まずセファルディームが移住し、十七世紀前半になってアシケナジームが定着していくのです。キリスト教の教会に相当する施設として、祈りの場であり、学びの場でもあるシナゴーグがありますが、そのシナゴーグも両者は一緒にありません。対立という言葉には違和感があり、通婚関係もほとんどなく、同じユダヤ人なのですが、違和感というか、相当対立に近い感情を持っていたようです。こういう関係が錯綜していくわけです。

それ以外にも、近代の、特に東ヨーロッパ地域でいような偽メシアの運動にまきこまれ、ついにはイスラームに改宗してしまうなどという人々も出てきます。東ヨーロッパからオスマン帝国の領土に移ってしまつたなどという人たちがいて、ユダヤ教徒からムスリム

りするのです。一種の聖者崇拜などもあり、これも神学的には異端的なものにならざるを得ないのです。偶像崇拜を厳格に禁ずる立場がユダヤ教ですから、聖者としてそれを崇拜の対象にするというのは偶像崇拜に近づくわけです。ところが、実際には北アフリカの西の地域、モロッコなどのユダヤ教徒には相当その傾向があるのです。面白いことに、イスラム世界でも聖者崇拜がありますが、それと地域的に重なるようです。今、イスラエルでモロッコの出身者が集団をなしていますが、その人達は、アシケナジーム、あるいはヨーロッパ系というべきか、いつてみればイスラエル社会のエリート層からは、疎外感を味わっているグループです。現実の政治行動のなかでは右翼的な動きをとったりします。そして底辺の部分でもありますから、アラブ人労働者あるいはパレスチナ人労働者と競合するような状況も起こっていて、むしろパレスチナ問題ではミリタントな方向を示したりする、それが、リクードという保守的な現与党ですが、それを支えていく部分になったりするのです。つまり、ユダヤ人という

存在は決して一様ではないし、神学的な理論から考えても説明しきれない人々が相当いるということです。こういうことが全部、理論の問題として考えたと「ユダヤ人性」に引がかつてくるわけです。誰がユダヤ人なのか、ということはなかなかいえない。しかも、今話してきたことはほとんどまだ宗教のレベルですけれども、これが近代になってくるとどんどん変わってくるわけです。

現実には多くはないケースですが、改宗者をどう扱うかという問題も、一応考えておきましょう。改宗という言葉を、よく我々はニュートラルに使いますが、ユダヤ教に入ってくる改宗と出て行く改宗とがあり、それは区別されます。ユダヤ教に入ってきた場合、英語でしたら *proselyte*、ヘブライ語でしたら *ger* という言葉で表現します。改宗した人はみんなユダヤ教徒として認めていきます。もちろん実際には、それを受け入れる側は違和感を持っていますからなかなか十分にとけ込めない、そしてそこにまたある種の差別が起こったりするのですが、ともかく理屈の上ではユダヤ人と

してあるいはユダヤ教徒として一人前に認めていきます。その場合には、宗派によっても異なるのですが、儀式をしなければいけません。まずユダヤ教徒になることの意味、あるいは危険性について考えさせる警告が与えられます。ついで、男性であれば生殖器の包皮部分を環状に切り取る割礼 *circumcision* (英語)、*brit milah* (ヘブライ語) という儀式をします。それから全浸礼 *immersion* (英語)、*tevilah* (ヘブライ語)、要するに身体全部を頭まで水につけます。そのための儀式用の浴槽 *mikveh* (ヘブライ語) が使われます。ドイツではヴォルムスという都市がユダヤ人にとって重要な所で、かなり初期の段階から拠点になっていくのですが、ヴォルムスのシナゴーグでは今でも中世以来のミクヴェーが保存されており、実際の改宗の儀式の時に使われているそうです。女性は全浸礼だけです。こういう儀式を経ないとユダヤ教徒になれませんが、以上は正統派の場合で、改革派などは大幅に省略されております。

逆にユダヤ教から出て行った場合は背教者 *apostate* (英語)、*munar* (ヘブライ語) ということになるわけです

が、これも自発的、あるいは積極的に背いていったのか、それとも誘惑に耐えかねて、もしくは強制されて出て行ったのか、そういうことを区別するのです。しかしこの背教者も、ユダヤ人というか、ユダヤ教徒であり続けるという立場をとるのです。そのことは、背教者がユダヤ教に復帰する場合には何の儀式も要しないということにも現れています。ユダヤ教の宗教法では、ユダヤ教徒が自らの信仰を変えていくことは仕組みからして不可能であるといっています。仮に形の上で異なる信仰を表明したとしても、その人はもちろん罪人ではあるけれど、ユダヤ教徒でありうるのです。

こういう事柄を整備していく宗教法というのがありまして、これも『タルムード』に典拠を持つわけですが、『タルムード』は膨大でなかなか分からない、本文に細々としたいろいろな歴史上の歴代のラビ達がいっことが書かれているわけですが、そういうのをいちいち見るわけにはいきません。そこで十六世紀に『シユルハン・アルーフ』という法典が作られます。これは、整えられた食卓、あるいはテーブル・クロスを掛

けられた食卓といった意味で、もともととはスペインのトレドに生まれ、その後亡命したヨセフ・カロという人が、ある意味でわかりやすく体系化し、まとめたものです。これが、印刷物としては一五六四年から六五年にかけてヴェネツィアで出版されていますが、正統派の規範的な典拠になっていきます。以前から考え方としてはだいたいできあがっていたのですが、このなかにはつきり「ユダヤ人の母親から生まれた者あるいはユダヤ教への改宗者」、それが英語でいえば *convert* だということになるわけです。ですから、日本語だとユダヤ人もしくはユダヤ教徒だということです。こういう格好でユダヤ人概念というのができあがっております。以上は、いってみれば前近代の宗教の問題からみたものです。

#### 近代ドイツのユダヤ人

一六七一年に、ベルリンに近代最初のユダヤ人コミュニティができあがります。それ以前にもユダヤ人が住んでいた歴史はあるのですが、しばしば追放された

り虐殺されており、十六世紀の半ばから一六七一年に至るまで百年あまり、ブランデンブルク選帝侯国では追放されて全くユダヤ人がいないという状況がありました。ところがこの年、ウィーンからユダヤ人が追放されるといふ事件をきっかけに、大選帝侯フリードリヒ・ヴィルヘルムが、裕福な五十家族のユダヤ人を受け入れるのです。その受け入れは、三十年戦争で疲弊した国家の再建を目的として行われたもので、その後のフランスからのユグノー（カルヴァン派新教徒）の受け入れとほとんど共通しております。ともかく、ベルリンでは一六七一年に最初のコミュニティができます。ただし、ドイツ語圏全体はこうだということとはなかなかいえないのです。ドイツは、小規模なものまで含めれば、数多くの領邦国家に分裂しておりました。神聖ローマ帝国の一定の段階で、主権国家はいくつあるかという大変面倒な議論にもなりかねないのですが、二百とも三百といってもかまわないような状況が十七世紀あたりになるとできてしまいます。ある程度の傾向はもちろんありますが、具体的なユダヤ人政策という

のは領邦ごとに違っており、ドイツ全体がこうであるということとはとてもいいにくい事柄なのです。その後の時代も含めて考えますと、比較的影響力もあり重要な意味を持つのが、ブランデンブルク・プロイセン、あるいはその中心としてのベルリンということになるわけです。ここでは主にベルリンを例に出します。

ドイツ語圏のユダヤ人世界に出てきた大きな変化がハスカラー運動、つまり啓蒙運動で、十八世紀の半ば以後に出現します。ハスカラー運動の創始者はモーゼス・メンデルスゾーン Moses Mendelssohn（一七二九～八六）と考えられており、そしてメンデルスゾーンを引き継ぐような人々が出てきますが、それをマスクリームと呼んでおります。啓蒙主義者という意味です。この運動が起こってくる背景には、ドイツ・ユダヤ人社会というものが、明らかにキリスト教世界に対して、宗教的にも文化的にも同化を始めていくという事実があります。男たちの外見上の変化としては、ひげを剃り落としてカツラを着けるようになります。ユダヤ教では、元来もみあげ部分は剃りません。直接カミソリ

で毛を剃り落としてはならないというタブー意識があるのです。長らく伝統的な慣習になっており、それが宗教的な掟とほとんど重なり合って考えられてきました。ですから、ひげをそなえているのがユダヤ人男性というイメージが強かったのですが、明らかに十七世紀から十八世紀あたりでそれが変わるのです。明らかに周囲のキリスト教社会といろいろな意味でなじんでいき、一体化していくのです。それは、逆に一体化しないと、差別を被ったり、あるいは商業活動がしにくくなったりするというようなことが現実にあつて、必要に迫られた変化でもあるわけですけれど、長期的にみると、思想の面でも集団全体のあり方に関しても影響を与えていきます。「宮廷ユダヤ人 Hofjuden」、宮廷の御用達、出入りの商人達ですが、特に三十年戦争を経過するあたりから重要な意味を持ってきます。もちろん「宮廷ユダヤ人」の形そのものはそれ以前からあるのですが、だんだん重商主義、あるいは絶対主義の段階に移行していくなかで、経済的な需要が高まってまいります。そして、「宮廷ユダヤ人」と呼ばれた人々

の存在価値も同様に高まっています。その人達が、マスクリームの社会的な基盤にもなっていたわけですから、そして、地域の言語、あるいはユダヤ人コミュニティの外の言語を積極的に習得していくようになりまします。もともとはイディッシュ語で日常生活を行い、宗教儀式をヘブライ語で行っておりました。ただしユダヤ教の場合、実は今でも内部ではかなりの議論があるようなのですが、明らかに男女差別といえるような状況があります。男性優位であることは否定できないと思います。シナゴグでの礼拝の場も、男性と女性とがはっきり分けられ、主たるスペースは男性が占めていました。宗教活動を担うのは男であると考えられていましたから、ヘブライ語を学ぶのは男達であり、現実には女性達のほとんどがヘブライ語はできず、イディッシュ語だけで暮らしてきました。ですから、ドイツ・ユダヤ人の母語はまずイディッシュ語でした。ヘブライ語は後になってからで、教養を身につけていく男達の言語でもあったわけですから、現在のイスラエルの公

用語は近代ヘブライ語です。しかし超正統派の人たちなどは今でもイディッシュ語で暮らしており、近代ヘブライ語も分かるのですが、日常生活ではまず使いません。また、もともと極端な人達は国家としての現在のイスラエル国家そのものを認めません。ユダヤ人の国家はメシアの到来によってこそ実現しうるはずのものだ、と考えるからなのです。

また話を元に戻しますと、今申し上げたような実態からだんだん離れて、豊かな階層としての「宮廷ユダヤ人」達が地域の言語を習得し、しばしば娘達にはフランス語を学ばせたりしますが、そしてそれは結果的に「良い結婚」と「良い家柄」をもたらし、やがて混合婚、つまりキリスト教徒とユダヤ教徒との結婚が起こってまいります。これも同化を促進していく大きな要因になっていくわけです。それから地域の新聞を読み始めます。ユダヤ人社会の新聞というのは、十七世紀のアムステルダムでいちばん最初に出たといわれているのですが、十八世紀あたりまで数多くはないのです。またヘブライ語で書かれたものを読めないユダ

ヤ人社会の人々もたくさんいますから、そんなに重要な意味を持ち得ないのです。しかも、「宮廷ユダヤ人」が行う商売の相手はキリスト教徒の裕福な階層であったり王侯貴族で、そういう人々とのつきあいや取引に必要な情報というのはヘブライ語の新聞ではまず得られませんので、ドイツ語やフランス語などで刊行されている地域の新聞を読めないと困ったりするわけです。そういうところから、地域の言語を習得し、新聞を読むという状況が、一七三〇〜四〇年代あたりからある程度一般化してきます。ただし、これはユダヤ人社会全体から見れば、明らかにごく一部の動きです。

そうしたなかで先のメンデルスゾーンという人が登場します。ドイツ語世界への最初のユダヤ人参入者と考えられますが、これは後世に影響力を発揮し、及ぼしたという意味です。彼は宗教学的にも哲学的にも重要な存在であったと考えられています。もともとは宗教的な環境にとっぷりつかっていた人です。中部ドイツのデッサウ Dessau に生まれるのですが、家系は『トーラー』を書く家系なのです。『トーラー』は『モ

ーセ五書』だと申しましたが、具体的な物としての『トーラー』はシナゴークに収める手書きの巻物のことでもあります。シナゴーク内の聖櫃には『トーラー』が収められており、それ以外はご神体とか神をシンボライズする物はありません。一番大事なのはこの『トーラー』で、これを書く専門職があり、しかも手書きで筆写しなければなりません。これは間違えてはいけないうえです。『トーラー』の中味に通じてなくてはいいけないのです。メンデルスゾーンは、そうした『トーラー』書きの家に生まれ育ったわけですから、一般のユダヤ人以上に宗教的雰囲気強く染まってきた人だともいえるでしょう。彼は、デッサウからベルリンに出るラビに連れられてやってまいります。新しい環境の下で西欧世界の文化に目を開かれ、英語・フランス語・ギリシャ語など習い、さらに啓蒙の時代でありますから、今風にいえば科学的な読み物などにもふれていくなかで、従来の自分が受けてきた教育の偏狭さ、物事を実際に考えていく際の弱さといったものを思い知らされていきます。いろいろ勉強する中で、

むしろ普遍主義的な、あるいは合理的な解釈の方法を身につけてまいります。ですからラビ達は、メンデルスゾーンの見解がだんだん理論の傾向に進んでいき、ユダヤ教本来の思想からは逸脱していくということで、激しい批判を浴びせたりします。つまりメンデルスゾーンは、ユダヤ教の世界に、そこから出てきながら新しい別な世界の息吹を吹き込んだ人物であったのです。その一方で『トーラー』をドイツ語に翻訳しました。ただしその翻訳は、ローマ字で日本語を記述するように、ヘブライ文字表記でなされました。その結果、ヘブライ語があまり分からず、イディッシュ語で暮らしていた女たちなどにとっては、イディッシュ語はドイツ語との親近性が高く、しかも表記としてはヘブライ文字を使っておりますから、メンデルスゾーンのこの翻訳によって、実は初めて、『トーラー』がある程度自分で理解できるものになったのです。ですから、いろいろな意味で、メンデルスゾーンの行動はユダヤ人社会にも面白い影響力を発揮するのです。そして彼は、合理的な解釈を通じて、政教分離の原則に近づいてい

きます。「強制力と統制権は教会的枠組みに与えられるべきではない」というのはよく引かれる彼の言葉なのですが、この考え方は、ラビの権威を主たる柱とするユダヤ人社会の内的自治組織にあつて、そのラビの権威を破壊していくという役割を発揮していくことになるわけです。

その一方では、ヘブライ語を尊重し復興しようという動きも出てきます。これは、世俗的・非宗教的局面でのヘブライ語使用を嫌う傾向が伝統的なユダヤ教にはあつた、ということに対する批判であつたかもしれませんが、ただし、他の考え方とだんだん矛盾してきますので、後継者というかメンデルスゾーンを師と仰ぐようなその後のマスキリムになると、だんだんヘブライ語を捨ててしまおうというような動きも強くなつてきます。そういうなか、今度はユダヤ教という宗教そのものを批判し、さらに変えていこうという動きが出てきます。それが改革派ユダヤ教の方向にだんだん向かつてくるわけです。そして一方では、現実の生活あるいは自然現象を理解する力がユダヤ人社会の教育

の中には欠けているという考え方に基づいて、もっと自由な教育を施そうという考え方がマスキリムのなかに強く出てきます。その一番典型的な例として出てくるのが、一七七八年ベルリンに設立されたユダヤ人自由学校です。これは、明らかにハスカラー運動の成果なのです。この学校を作るにあたって尽力した主要メンバーは、マスキリムの代表者でもあります。フリードリッヒ・D. Friedländer、ヴェッセルリー・N.H. Wessely、イツィット・ID. Itzig という人々です。ただし、これは簡単にはユダヤ人社会に受け入れられない側面を持っています。ある意味では、なかなか変わろうとしない頑迷なユダヤ人社会にどうやって新しい息吹を吹き込もうとするか、むしろそういう発想が非常に強い人達でしたから、効率を優先させ、国家の権威を借りて上からの啓蒙を強行しようとする傾向が、明らかに強く出てきますし、当然それに対する反発もありました。また十八世紀の終わり近くになると、国家の側が次第にユダヤ人をどう社会的なシステムのかにに取り込もうとするのか、あるいは人材としてのどの

ように改変し、有為な人間集団を作り出そうとするのか、さらに具体的にいえば兵隊としてどう使えるか、ということを考え出すわけです。

一七八一年に、プロイセンの官僚で、文学者でもあつた啓蒙主義者のドーム・C.W. v. Dohm という人が、『ユダヤ人の市民としての改善について』という文献を書きます。政府あるいは国家の側も、ユダヤ人に対する教育が課題としてだんだん見えてきた時代です。それにうまく乗っかり、その権威を借りて上からの啓蒙を強行しようとするものの、それがなかなか現実には受け入れられないという悩みを、マスキリムは経験することになります。ホンベルク N.H. Homberg も代表的なマスキリムの一人ですが、ガリツィア（ポーランドの東の端からウクライナにかけての、あまり産業もない貧しい地域で、ユダヤ人が多かった）のユダヤ人に対する施策として、オーストリア政府が、ドイツ語で教育するユダヤ人学校を作ろうという計画を立て、その視学官に任命されます。そこではユダヤ教教育もやるのですが、その教科書として使われていくユダヤ教関係の文献の

検閲にも協力しました。これはラビ達の大変な反発を食らうのですが、実際にはホンベルクのような人物が、ある意味権威に支えられて教育改革を手がけていきます。しかし、ラビの影響力の強い民衆レベルでの一般のユダヤ人達が、キリスト教への洗礼を強要されるのではないかと恐れたものですから、学校ができてなかなか行かない、というような非協力あるいは反対にしばしば遭います。こういう動きに対応、ないしは連動するような形もとつつ、十八世紀の終わりから十九世紀の初めにかけて、いわゆる「ユダヤ人解放」が進んでいくわけです。

一七八二年には、オーストリアで、ヨーゼフ二世によつて「寛容令」が出されます。これは確かに内容は注目すべきものでしたが、なかなか実行力を伴いませんでした。ヨーゼフ二世という人は、母親のマリア・テレジアとずっと共同統治をやっていて、一七八〇年に母親が亡くなると、単独支配を始めます。そこで、今まで考えていたけれど、なかなかできなかった施策を、どんどん打ち出していきます。しかし官僚の

反対にあり、実際には、ほとんど効力を持ち得なかったのです。とは言っても、明らかに皇帝が発した法令ですから、思想的にも大きな衝撃を与えています。さらに一七八九年以降、フランスで革命が進行し、「人權宣言」が発せられたり、憲法制定議会のなかでユダヤ人をどう扱うかというような議論が進められていくわけですが、そうした事柄が外からの刺激として強く作用してきます。

それから、アメリカの情報というのはかなり早くヨーロッパにフィードバックされていたようです。一七八七年にアメリカ合衆国憲法が制定されますが、その第六条第三項で、公職就任に際しての宗教上の審査を否定しております。さらに九一年の修正第一条で、国教の樹立を禁止し、全面的な宗教の自由をうたったのです。これは法思想の点からいっても、ヨーロッパのユダヤ人に相当な影響を与えていきました。しかも現実には、ドイツのユダヤ人のなかにも完全な市民権を享受するような人々が出てまいります。先ほどのマスキームのなかにイツツイヒという名前が出てきました

が、これは非常に裕福な一族で、ベルリンで活動しておりました。この一族に、帰化特権と訳しましたが、*Naturalisationspatent* というものが与えられます。これは、キリスト教徒市民と全く同等の内容で生活してよろしいというものです。しかも注目すべきことは、それが一代限りではないのです。かつては、特許状で何らかの権利を認める場合でも、それがどう継承されるかというのは非常な問題でしたし、継承に際してはしばしば多額の税金の要求があったりしたのですが、そうではなくて、このイツツイヒの場合、子孫とそれぞれの配偶者に至るまで完全なる市民権を与える、というものでした。

一八〇八年には、ベルリンの都市条例が出されまして、一八一二年の解放令に先行するような形で、ユダヤ人の市民権を公認しております。これも横道に逸れてしまうことになりましたが、興味深いことに、その都市条例の条文のなかに、再洗礼派のメンノー派に対する言及があるのです。メンノー派は、もちろんキリスト教徒なのですが、ユダヤ人と同じように市民権を認

められなかったグループでして、シモンズ・メンノーを引き継ぎ、ファンダメンタルな思想を強く持つっている人々でした。そういった人々が、ドイツ語圏にも点々といったのです。再洗礼派一般への言及ではないのですが、メンノー派のことは特にはっきり出てまいります。

一八二二年に、プロイセンの「ユダヤ人解放令」が出されます。この解放令の出たすぐ後に、前に名前を出したフリードリッヒ・メンダーが匿名でパンフレットを出しました。このあたりから、ますます改革派ユダヤ教への道がはつきり見えてくるのです。ユダヤ教徒に、訴えるという形をとるのですが、その時に *Israelit* という言葉を使います。こちらのほうがむしろ差別色の薄い言葉だと考えられており、あえて *Jude* (複数形が *Juden*) を使わないで *Israelit* という言葉を使っております。あるいは、シナゴークのことを念頭に置いていっているのですけれども、言葉としてはキリスト教の教会にあたる *Kirche* を使い、その組織改革を訴えたりしています。また、祖国はプロイセンであり、母語としてはドイツ

語であって、ドイツ語で祈りを行うべきだ、などというようなことも言っております。ここらあたりから、だんだんユダヤ教改革派というものが出来上がってきます。

ユダヤ教改革派については、*reformed* とも *liberal* とも表現されます。この二つの表現は、ユダヤ人の研究者のなかでも混同して使われたり、あるいは区別して使われたりしますが、大雑把には大体同じものとして使われることがしばしばです。象徴的にはオルガンを礼拝に使ったりします。事実関係としては、ヤコブ・Jacobson という人が、ゼーゼン *Seezen* というハルツ山塊の西の麓にある小さな町で、いろいろと新しい教育を始めるのです。世俗主義的な指向性を持ち、開設した寄宿学校にユダヤ教徒とキリスト教徒の子弟を迎えるという、ある意味では二つの宗教を対等に扱うような、注目すべき事柄を行います。それが一八〇一年のことです。さらに一八一〇年には、シナゴークの典礼にオルガンを導入しました。もともとユダヤ教では楽器は使ってこなかったのです。ただし、改革派

の人々はだんだんシナゴークという言葉そのものを嫌うようになり、今ではテンペル Tempel という言葉をもっぱら使っています。後年、ヤコブゾンンはベルリンに移ります。しかし、ベルリンのコミュニティはまだ正統派の色彩が強いものですから、とうてい受け入れられず、自宅で新しい礼拝を実践していきます。ドイツ語ですべて礼拝を行い、オルガンを使って聖歌隊が歌うというように、プロテスタントの典礼がモデルになっっているわけです。これは、もちろん正統派からは激しく反対されました。しかもこのヤコブゾンの場合にも、国家が背景にあります。ゼーゼンという所は、ナポレオンによってつくられたヴェストファーレン王国に、一時期編入されます。そのヴェストファーレン王国の宗教政策の一環として、コンシストワール consistoire、宗務院とでも訳しましょうか、宗教の問題に限っていろいろな決定を下したり、あるいはトラブルの要因を処理していく、そういう組織ができるのですが、その役職をヤコブゾンは与えられています。ですから明らかに国家的権威が背後にあったわけです。

宗教的な方向としては、十九世紀が進むにつれて、どんどん伝統的なユダヤ教から離れていきます。その一つの極致が、「ピッツバーグ綱領」として知られています。これはアメリカの改革派のラビが作ったものですが、ピッツバーグで一八八五年に発表されました。注目すべきことは、ユダヤ人の「民族性」を否定し、パレスチナという地域、あるいはシオンの地との結びつきも否定しているということです。その意味では、普遍主義的な傾向を強く打ち出します。「我々は、自らをもしや一族としてではなく、宗教上の一コミュニティとして考えるものである。したがって、パレスチナへの帰還を望みもしなければ、アロンの子らが取り仕切るもとで犠牲をささげる礼拝を行うつもりもないし、ユダヤ教「人」国家に関係する律法のいずれの回復をも期待しない」と、宣言したのです。

今日は時間の関係もあって、シオニズムのことにはふれられないと思いますが、明らかにシオニズムに批判的な流れというものが、十九世紀の終わり頃には出てくるのです。しかし実際には、一九三三年に

ナチス政権が成立し、それ以降の状況、それから一九四八年にイスラエル国家ができることによって、このピッツバーグ綱領の路線が持ちうる現実的な意味合いというものは小さくなってしまうますが、思想的にみると興味深い方向が出てくるわけです。そして非常に世俗的な傾向が強まっています。現在、アメリカにユダヤ人の多くは、実際には改革派的な傾向が強いようで、自分の宗教思想はどうなのかと、あまり突き詰めて考えてはいないのではないかと思います。そのことは、タブーの面から見ても、そういうものを食べて良いか、どういう調理でなら食べて良いか、というコーシヤールのルールがありますが、そういうものを無視する流れが実際のアメリカでは強いと思います。ただし、こういった問題について表立った議論をすると、建前として、どうしても正統派的な考え方が強く出てきます。ですから、今のイスラエル国家では宗教的には明らかに正統派によって牛耳られている、あるいは振り回されているといったいい傾向が出て

います。

話がまた逸れてしまいましたので、戻します。十九世紀から二十世紀にかけての動きとして考えますと、一八一九年にユダヤ人文化学術協会ができたことは重要な意味がありました。やがて、一世紀ほど後の一九二〇年代から三〇年代にかけては、ユダヤ教神学というものが大変な高まりをみせます。ヨーロッパの大学は、もともとキリスト教について研究することがまさに一番の中心でしたし、そうした伝統があるわけですが、逆に言えば、ユダヤ教をきちんと研究する機関がないのです。ラビを養成する機関としての神学校はあるのですが、むしろ一般の哲学的な成果というものを含めてユダヤ教を根本的に、あるいは原理的に考えていく神学部のようなものが、それまでないわけです。そういうものに代わりうるものとして、ドイツ、特にベルリンのユダヤ系知識人達がそういう動きを作り出していきます。その先駆的な事例が、このユダヤ人文化学術協会という形になったわけです。やがて、「ユダヤ教研究 Wissenschaft des Judentums」とでもいべき学問

体系がだんだん確立されていくのです。

ところが、一八四八年までの「三月前期Vormärz」の時代には逆転現象が起こり、だんだん後退がみられます。たとえば一二年の解放令の第八条が、二二年に廃棄されてしまいます。第八条というのは、大学の教官職、あるいはその他の教職、さらには地方官職へのユダヤ人の登用を一応は認めていた条項なのですが、それが十年たつて、ほとんど意味がないのではないかという考えのもとに廃棄されてしまいます。法律レベルで解放しても、現実の社会的な解放と実際には結びつかないで、なおも差別が強く残っており、そういう状況が続くというのか、むしろ露わになってくるのです。ですから、「ヨーロッパ文明への入場券として改宗する」という、ハイネの有名な発言がありますが、そういう事柄が一方では起こってくるわけです。現実の差別がなかなか解消されず、改宗することでキリスト教社会に「同化」していくことが解決策だと考えられているなかで、ユダヤ教社会の思想的な、あるいは理論的な純化というようなものを求めていく動きが、改革派の

なかに特に強くなつてまいります。そして、ベルリンはその拠点になっていくのです。

一八四五年には、「ユダヤ教改革団体」という組織がベルリンに設立されました。ベルリンは、もともととは伝統的なユダヤ教、言い換えれば正統派ということですが、それが強かったのです。しかし、だんだんと変わってきました。むしろ改革派的な色彩が少しずつ強くなっていきます。その一方で、ユダヤ人コミュニティは、従来は単に黙認された宗教団体でしかなかったのですが、一八四七年に公法上の団体として認められるようになります。そうなりますと、国庫補助金の交付を受けたり、学校を経営することができるようになります。同じく一八四七年に、内容的には「一八二二年法」をさらに敷衍したようなユダヤ人立法が出てくるのですが、実際には四八年のフランクフルトでの国民議会にあまり反映されず、しかも四八年革命のなかでそれはついえさつてしまいます。そして一八五〇年にプロイセン憲法が改訂され、その第四条で、ユダヤ人をも含む全プロイセン国民の法的同権というのが、

改めてここで打ち出されてきます。

そうしたなか、ベルリンの改革派シナゴークが一八五四年に献堂されますが、正式にはすでにテンペルという名称を使っておりまして、S・ホルトハイム S.Holdheim という人が初代ラビに就任します。さらに一八六六年、ベルリン全体の中心的なシナゴークとして「新シナゴーク」が献堂されます。近代ベルリンでは、一七二四年に最初のシナゴークがハイデロイター小路に献堂され、そこが長らく中心的な位置を占めてきたのですが、すでに手狭になっていたものですから、それに代わるものとして建てられたのです。この「新シナゴーク」は、ナチ期に破壊され、さらに第二次大戦中の空襲で壊滅的な打撃を受けたのですが、一九八〇年代からの国際的な募金活動に支えられ、ドイツ統一後の一九九〇年代初めに、かつての建物的一部分が、元の場所に復元されました。現在、旧東ベルリン地区のオラーニエンブルク通りにまいますと、最上層に金色に光り輝くドームをいただく壮麗な建物を目にすることができ、その内部を見学することもでき

ます。この「新シナゴーク」が十九世紀後半に完成した時、ベルリンのユダヤ人社会では、すでに改革派が優勢になっていましたから、「新シナゴーク」にも聖歌隊やオルガンが導入されました。そうしますと、今度はその「伝統破壊的」で「新奇」なものを認めたくない正統派の居場所がなくなつてしまいます。ユダヤ人コミュニティが、公法上の団体として認められ、キリスト教のかつての教区教会などと同じ考え方なのですが、その地域の信者達はその離脱できないのです。改革派が運営するコミュニティのなかに、正統派や、中間派としての保守派も、やはりそこに留まっていなければならないのですから、そのことには大変な不満を感じる人々が出てきたのです。そうした軋轢のなかから、一八六九年、正統派による単立ユダヤ人コミュニティが設立されました。ドイツ語では、律法に忠実なユダヤ教徒団体といった意味合いの表現を採用し、しかもGemeindeという言葉避けてGesellschaftを使っております。そして、Adass-Jisroel という表記が後ろにつきました。この名称を持ったコ